

## 随 想 良 い 英 文 を 書 く た め に

### — 英 語 ら し い 英 語 を 目 指 し て —

三 島 良 直\*

論文を書くという作業は経験の多いほど楽であり、データが揃い考察の見通しが立てば机の前で一定の期間試行錯誤を繰り返すことで仕上げられる、という潜在的自信ができるものです。試行錯誤の中で最も重要な筋立ては何度も章の順序を入れかえたりして論文として起承転結が明解なものにする作業なのですが、経験の浅い者にはその筋の流れを表現する文章の正確さやスタイルに自信がなく独り立ちするまでは必ず指導者に直してもらいながら書き方を覚えることとなります。英文で論文を書く場合最も苦勞するのがこの点であり、英語を母国語として話し、しかも論文を多く書いている指導者について学ぶことがほとんど不可能なためにいつまでたつても苦勞が軽くなるように感じるものと思われまふ。私は論文の書き方、などと大きなことの言えた身分ではないのですがカリフォルニア大学パークレーへ学生として留学し Ph. D 取得後 Post Doctoral まで含め五年余英語論文で苦勞した経験から文章の正確さ、および英語論文でスタイルを作ること、の 2 点について感想を述べさせていただきます。

#### 1. 英語論文中の誤りとは

はじめに私流に日本人の書く英語論文の誤りを分類して見ようと思ひます。第 1 は言うまでもなく「文法上の誤り」となりますが 1) 単数形か複数形か? 2) a か the か? 3) 過去(完了)か現在(完了)か? がほとんどの場合の問題で、これらはこの「良い英文を書くために」シリーズでも扱われているし、他にも取り上げられることが多いのでここでは省略します。ただし後で述べる英文のスタイルを作るための方法を採られると自然にこのような点も改良されるものと思ひます。次には文章自体の問題ですが、文法上の間違いはないとして以下の 2 つに分けて考えることができますと思ひます。

①文章の意味が通らないもの(自分では何度見直しても正しいと思ひ文で、欧米人が読むと何が言いたいのかわからない文)

②意味はわかるが「どこかおかしな」文(欧米人に修正の理由を聞いても「そうは言わないから」という答えしか返つてこない文)

すなわち①は不正確な英文、②は英語らしくない文ということになります。①の間違いをしなれば英語論文と

して合格となりおそらく欧文誌の査読も(英語については)通るはずです。②を克服すると欧米人の読みやすい文が書けるわけでひいては英文を書くコツをつかみ、良い意味の自分のスタイルができることとなり英語論文を書く苦勞が大変に減るはずです。

#### 2. 不正確な英文

不正確な英文が生れる最大の理由は書き上げた、あるいは頭の中で作り上げた日本語を直訳することが多いからです。英語に逐語訳したために日本語では省略された部分が欠如して英文としての意味が明確でなくなつたり主語と述語が正しく対応しないといった書いた本人には見付けにくい間違いです。

例 1 : 「本実験では 4340 鋼に対する Si 添加の影響を調べた。」

(誤) An investigation was carried out on the effect of Si addition to a AISI 4340 steel.

(正) 例えは, An investigation was carried out on the effect of Si addition on the tempering response of a AISI 4340 steel.

例 2 : 「このような低いシャルピー衝撃値は粒界に析出した  $Cr_{23}C_6$  によるものと結論された。」

(誤) Such poor impact toughness properties are due to  $Cr_{23}C_6$  precipitated at grain boundaries.

(正) Such poor impact toughness properties are attributed to the presence of  $Cr_{23}C_6$  at grain boundaries.

例 3 : 「この合金を  $900^{\circ}C$  から  $1100^{\circ}C$  の種々の温度でオーステナイト化後水焼入れした。図 1 に示すように焼入れ硬さは  $1000^{\circ}C$  で最高であつた。」

(誤) The alloy was austenitized at various temperatures between  $900^{\circ}C$  and  $1100^{\circ}C$  followed by water quenching. As is shown in Figure 1, as-quenched hardness exhibited the maximum at  $1000^{\circ}C$ .

(正) The alloy was austenitized at various temperatures between  $900^{\circ}C$  and  $1100^{\circ}C$  followed by water quenching. As is shown in Figure 1, as-quenched hardness exhibited the maximum after an austenitization at  $1000^{\circ}C$ .

\* 東京工業大学精密工学研究所 Ph. D

以上の3つの例に示されるように日本語文の直訳は「日本人にしかわからない」英語になつたり、誤解されやすい英語になつてしまうことが多いようです。この他にも日本語には「諸性質」とか「所定の目的」といつた英語にならなくはないが意味のはつきりしない言葉が多く、少なくとも前後の2、3の文との関連からはつきり意味のとれるように示さねばならないと思います。例3の場合のように日本人には重複になるように感じられる場合でも正確な英文にするためには言い直しも必要なときがあり、まず正確に意味のとれる文とした上であまりにくだい文になると思つたら何か違う表現方法はないかと考えるという順に英文を構成していくと良いと思います。このような観点から文章をひとつひとつ注意深く、日本語と対応してでなく英文としてチェックしていくことが重要です。この作業を繰り返して行けば回数を追うごとに間違いを見つけることが少なくなり、よく言われる英語で考えながら英文を書くという境地に自然に達するものと思います。

### 3. 英語らしい文を書くために

私がアメリカではじめて論文を書いたときの話ですが、ともかく四苦八苦して草稿を書きあげた上でそのまま教授に見せるには英語がヘタすぎて申し訳ないと思いやはりドクターコースのアメリカ人に英語を見てもらいました。いろいろ直されましたがその中で「この文ではこういうことが言いたいのだろう?」「それならこうは言わない」という訂正や「こう言つた方がスッキリする」という訂正が随分ありました。ところがその後教授が直したもので同じところをまた別な言い方に変えてあるのが多く、その理由はまたしても「こうの方がスッキリする」なのです。この例で私が指摘したいのは“書く人によるスタイルの違い”があるということで文法上の間違いがなく、意味も通る文であればスッキリさせるためにいくつもの“正しい”方法があることを認識せねばならないことなのです。私の場合回数を重ねるうちに教授に草稿を直接見せて、いくつかの修正(定冠詞のつけ方等)を受けるだけで通ることが多くなり「書くのがうまくなつた」とも言われましたが、これは私がその“教授流”をある程度身につけたことに他なりません。このような意味で日本にいて英文のスタイルを研究するには現在自分の携わっている研究分野で同一著者のシリーズ的なものを揃える手があると思います。著者(筆頭著者)にはアメリカ人かイギリス人の“Big Name”(大家)が選べれば一番でしょう。アメリカ人かイギリス人かで随分違うものですが要は同一著者のもの数編であることで、これを注意深く何度も読んでいくと決まつたパターンの文章を容易に見つけられると思います。例えば「焼もどし温度に対する引張り試験の結果」の項で「焼もどし温度が高くなると降伏応力は低下するが550°C以上の焼もどしでは再び増加する」などと言つた文があればそれをひとつのパターンとして記憶すれば他のいろいろ

な量の変化にも応用が効くし、数編の論文を見るうちにかなりのバリエーションを、しかも同一のスタイルで覚えられると思います。いろいろな言い方を一人の著者のスタイルをもつて覚えるのが肝心で、バラバラにいろいろな人の表現をその都度利用すると、いつでも無からスタートせねばならず苦しいものです。このような努力をしながら1)短い文を2)正確に書き連ねて行くことからはじめ、ひとまず First Draft を書き上げてしまい、その上で文章の流れを見ながら“くつつけたり”、“はなしたり”、“いれかえたり”をしながら Second Draft, Third Draft へと持つて行くのが良いと思います。ひとつ御注意申し上げたいのは、どこからか仕入れた“シャレた言い方”、とくに日本人が使いやすい文中の挿入句(例えば, that is to say,)等は自分のお手本とする著者の論文で使っているのを見たことがなければ使わない方が良いでしょう。

### 4. 音読のすすめ

英語として“どこかおかしな文”を発見し訂正するための1つの手段として英文をなめらかに音読できる技術を養うのが良いと思います。意味をとることに重点をおく読み方を離れ、声を出してできるだけなめらかに英文を読むくせがつくと文中のどこで息をつくと読みやすいか、などがわかります。前章で述べましたお手本とする一連の論文でこれをひまなときに繰り返しやつてみると必ず(その著者の書く)英文のリズムのようなものがつかめるはずです。アメリカ人はよく「日本人の書いた英語は読めない」と言います。これは意味がとれないのではなく実際に声に出して読もうとするとつかえてしまつてそれで読めないのです。このことから「良い英文は読みやすい」と言え、逆に音読がうまい人は「おかしな英文」に必ず気がつくはず。例えば“*It is shown that~*”のような“that 構文”では“that”と読んで一息つくわけですがそれに続く文は一息で読める文でないとその文全体がわけがわからなくなつてしまいます。また「それについてはいまだ明らかでない」を“*It has not yet been made clear.*”とすると読みにくいこと甚しいのです。口語と文語は明らかに違いますし「正確を期すること」が文章の最も大事なところですが、読みにくい文は正確さを失わずに読みやすくするための別の表現はないかと探すことが良い英文を書くために必要なことだと思います。

この「音読のすすめ」は「言うは易く行は難し」で必ずしも適切なアドバイスではないかも知れません。例えばどんなに読みにくい文でも何度も読んでいけば当人には読みやすくなつてしまふし、「音読がうまい」という判定基準が求めにくいからです。ただ「良い英文は読みやすい」ということを頭に入れ英文の中にあるリズムを体得するような日頃の心掛けのようなものとして覚えておいていただければ必ず良い英文を書くための力になることと思います。